社会科

教科領域別研究テーマ

【よりよい社会や自分の姿を思い描く力の育成】



よりよい社会や自分の姿を思い描く力の育成

実践者　高橋　祐貴，江角　紀行，萩山　知治
愛媛大学研究パートナー　井上　昌善，駕原　　進

第１章　はじめに

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが，成人して社会で活躍する頃には，我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。そのような時代の中において，一人一人が持続可能な社会の担い手として，多様性を原動力とし，質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。

そこで，子どもたち一人一人が社会の担い手としての自覚を持ち，よりよい社会の形成に向けての参画意識を高めていく上で大切な資質・能力を「よりよい社会や自分の姿を思い描く力」と捉え，その育成を目指して実践を進めている。本年次はこれまでの研究成果及び新学習指導要領の方針を踏まえ，生徒がどのような学びを実現することが育成したい資質・能力の獲得に有効かどうかを，「主権者教育」や「歴史×SDGs」など，実践者がそれぞれの切り口で迫っていくこととした。そして，育成すべき資質・能力の育ちを見取る際には，パフォーマンス課題を繰り返し実施し，単元のまとまりを意識して評価を行った。

第２章　研究の実際

研究（その１）

当事者意識を持ち，未来社会のよりよい姿を構想する学習指導の工夫
―公民的分野「持続可能な社会を目指して～これからの資源・エネルギー～」の実践より―

（実践者）高橋　祐貴

１　研究テーマ設定の理由

これからの教育において，「様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決する力を育成すること」が求められている。現代社会においては，現時点の事実を知識として身に付けても，社会そのものの状況が変化することから，それを生かせなくなる可能性が大きい。つまり，学習素材そのものが示す事実のみを認識し，それを覚えるような学習を続けていては，社会の激しい変化に対応していくことは困難である。そこで，常に社会の変化に関心を持ち，それを捉える意識を持とうとする態度を養っていくことが重要となる。そのような態度を養っていくためには，社会的事象に対して自分なりの意見を持つことや自分たちが社会を創っていくという当事者意識を高めることが求められるだろう。そこで，生徒自らが学び合いの中で社会的事象の意味や意義，そこで見られる課題やその背景について熟考するとともに，追究内容と現代社会との類似性を見いだし，そこから持続可能な社会の形成に参画する手がかりを得るという学習指導を充実させる必要があると考える。そのような学習の積み重ねが，主体的に未来社会のよりよい姿を構想し，社会の担い手としての自覚の高い生徒の育成に資すると考え，本研究テーマを設定した。

2　研究の内容及び方法

(1)　PBL×SDGs（社会科×理科）での教科横断的な単元設計

溝上（2016）が提唱している**プロジェクト学習**（project based learning（以下，PBL））を用いて単元設計を行う。各教科で学んだ既有の知識や経験を比較・関連・統合しながら課題追究を行うことで，深い学びの実現だけでなく，身近な生活や社会と学校での学びのつながりを実感しやすくなると考える。

(2)　学びの深まりを実感させるための ICT の選択・活用

学習過程や目的に応じた ICT の効果的な活用方法について研究する。練り合い・高め合いの場面において，協働学習者として多様な他者と同時につながる良さを実感させることにより対話的な学びの充実を図ったり，評価の際に自己の学びの変容や深まりを視覚的に自覚させやすいワークシートの開発を行うことで主体的な学びへと学習意欲の向上を図ったりしていく。

3　研究の実際

(1)　指導の計画

ア　PBL×SDGs（社会科×理科）での教科横断的な単元設計

PBL とは，実世界に関する解決すべき複雑な問題に対して，仮説を立て，プロジェクトとして探究・検証していく学習である。生徒の自己主導型の学習デザイン，教師のファシリテーションの下で，問題や課題，仮説などの立て方，問題解決に関する思考力や協働学習等の能力や態度を身に付ける。このプロジェクト学習に喫緊の世界的な課題となっている SDGs を組み合わせ，ともに実社会の事象を扱う社会科・理科の特性を生かした教科横断の単元構想を行った。本単元では，「日本の資源・エネルギー問題」を取り上げ，政府が目標として掲げた「2050 年には温室効果ガスの排出量を実質ゼロの社会」を実現するために，日本国内の温室効果ガス排出量で大きな割合を占める発電によるエネルギー生産や供給に着目し，今後のエネルギーがどうあるべきかを考えさせた。追究の際には，「社会科と理科における見方・考え方を働かせた追究を行いやすい」「両教科の学びのつながりを実感しやすい」「学習に対する有用感を高められる」という三つの利点があると判断し，「３E+S」（３E＝安定供給・経済効率性・環境への適合，S＝安全性）という観点を用いた。

イ　学びの深まりを実感させるための ICT の選択・活用の工夫

生徒同士のつながりを強め，意見交流が活発に行えるよう，ICT の特性である「多くの情報を整理・分析，表現できる」「双方向でやり取りできる」等を生かした，タブレット端末とロイロノートを活用し，学習した内容を整理・分析しながら生徒同士が考えを共有できるようにした。特に，学習内容や追究成果をロイロノート上に作成した１枚のワークシートで整理させることで，写真や動画，文献資料の内容といった大量の情報を一度にまとめられるようにした。また，本実践ではクラウド型のビデオチャットサービス「Zoom」を利用し，他校生徒との遠隔授業を想定して活動を行う中で，多様な「他者」と同時につながる良さを実感させ協働学習者としての自覚を高めるとともに，学習内容の深い理解につなげることを目指した。

(2)　指導の実際

ア　単元名

持続可能な社会を目指して　―これからの資源・エネルギー―（第３学年）

イ　単元目標

○日本の資源・エネルギー問題の解決のために経済的・技術的な協力などが大切であることに理解を深めるとともに，諸資料から必要な情報を選択・収集し，科学的に探究するために必要な基本的な技能を身に付けることができる。　「知識及び技能」

○日本の資源・エネルギー問題や今後のあり方について，既有の知識や経験を基に，理科や社会的な見方・考え方を働かせながら多面的・多角的に考察，構想し，自分の考えを説明，論述することができる。「思考力・判断力・表現力等」

○持続可能な社会を形成していく一員としての自覚を持ち，日本の資源・エネルギー問題について，今後のあり方を視野に入れ主体的に社会に関わろうとしている。「学びに向かう力，人間性等」

ウ　重点目標

＜本質的な問い＞

脱炭素社会に向けて，日本のエネルギーのあり方をどのように見直していけばよいか？

＜永続的な理解＞

現在，「2050 年までに温室効果ガスの排出量実質ゼロ」を目指すために様々な分野での「脱炭素化」が推進されている。日本国内でも二酸化炭素排出量の約４割が，発電によって排出されているという現状があり，「脱炭素化」を進める上で，二酸化炭素の排出量が少ない発電方法への転換が求められている。しかし，エネルギー資源や発電方法にはそれぞれ長所や短所があるため，環境に影響を与えず，経済的な価格で安定して使い続けるために特定の発電に頼ることは難しい。今後は，日本においても再生可能エネルギーの導入やエネルギーミックスを実現するための技術開発など多面的な取組を実施したり，国（政府）だけでなく企業や私たち一人一人が自分ごととして課題を自覚して行動したりしていくことが必要である。

エ　単元の評価規準と評価方法

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
日本の資源・エネルギー問題の解決のために経済的・技術的な協力などが大切であることに理解を深めるとともに，諸資料から必要な情報を選択・収集し，科学的に探究するために必要な基本的な技能を身に付けている。	日本の資源・エネルギー問題について，既有の知識や経験を基に，理科や社会的な見方・考え方を働かせながら多面的・多角的に考察・構想し，自分の考えを説明，論述している。	持続可能な社会を形成していく一員としての自覚を持ち，日本の資源・エネルギーについて，今後のあり方を視野に入れ主体的に社会に関わろうとしている。

パフォーマンス課題	その他の評価方法
あなたは資源エネルギー庁の職員です。政府が示した「2050 年までに温室効果ガスの排出量を実質ゼロにする」という目標について，一般の人も参加する中での公開討論会を行うことになりました。討論会のテーマは「2050 年には日本の発電は何を重視していくべきか？」です。 根拠に基づいた発表資料を作成して公開討論会に臨むとともに，そこで得た学びも生かして日本の資源・エネルギーに関わる課題に対する方策と自身の行動宣言をレポート形式でまとめてください。	○観察 ○調査活動における資料 ○討論会での発表の様子

オ　指導計画（全７時間）

時間	学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
1	・単元の学習内容への関心を高めるとともに，学習の見通しを持つ。	態		・本単元の学習に見通しを持ち，問題に対する班としての仮説を立てている。（ワークシート）
2 3	・社会科や理科の見方・考え方を働かせ，根拠となる情報の収集や主張の検討を行う。	知		・主張の根拠となる資料を社会科や理科の視点（３E+S）から収集，整理している。（ワークシート）
4	・追究成果を持ち寄って話し合い，討論会用の資料の作成を行う。	思		・情報を分析・考察し，論理的な説明を行うための発表資料を作成している。（観察・発表資料）
5	・外部講師の講話，共通実験を通して，班の主張の妥当性や正当性について再検討する。	思 態		・講話や共通実験，質疑応答などに積極的に参加し，考えを改善・修正しようとしている。（観察・ワークシート）
6 本時	・公開討論会を行い，資源・エネルギーの今後のあり方について考察・構想する。	思 態	○ ○	・日本の資源・エネルギーの今後のあり方について，複数の視点から根拠を挙げ，自分の考えを説明，論述している。（ワークシート）
7	・レポートを読み合い，現代社会における課題を追究していくための視点や方法を身に付ける。 ・学習の振り返り，学びを自覚する。	思 態	○ ○	・他者との意見交換を通して，現代社会の課題を追究するための視点や方法についての自らの考えを再考し，深めている。（レポート） ・自分の追究に対する成果と課題を記述している。（ワークシート）

⑶　授業の実際

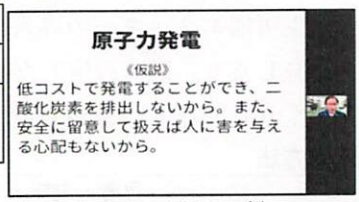
ア　主題

これからの日本の発電はどうあるべきかを判断しよう。

イ　ねらい

２教科での学習内容を比較・関連させながら，今後のよりよい日本の発電のあり方について多面的・多角的に考察するとともに，自分なりの考えを持ち，それを表現することができる。

ウ　展開

学習活動(形態)	時間	○司会の働きかけ●教師の働きかけ・予想される生徒の反応	○指導の工夫　◎評価規準（評価方法）
1　討論会の進め方を確認した。（一斉）	5	○課題確認を行い，開会宣言，会の進め方を説明します。 ●教師はファシリテーターに徹し，意見がまとまらないグループや，司会が行き詰まった場合に支援に入った。  Zoomで司会を行った生徒	○司会進行を生徒に任せることで主体性の育ちをねらった。
2050年に向けて日本の発電は何を重視していくべきなのだろうか？			
2　パネリストによる主張を行った。（一斉）	10	○パネラーのみなさんは主張を発表してください。 火力発電を重視する立場 原子力発電を重視する立場 再生可能エネルギーを重視する立場  原子力発電 《仮説》 低コストで発電することができ、二酸化炭素を排出しないから。また、安全に留意して扱えば人に害を与える心配もないから。 パネラーの主張の様子	◎自分の立場や考えを明確にし，根拠に基づいて論理的に発表している。 （観察・発表資料）
3　グループ討論を行った。(小集団)	20	○フロアのみなさんはグループに分かれて討論会を行ってください。 （「Zoom」のブレークアウトルームを活用）  グループ討論中の様子→	

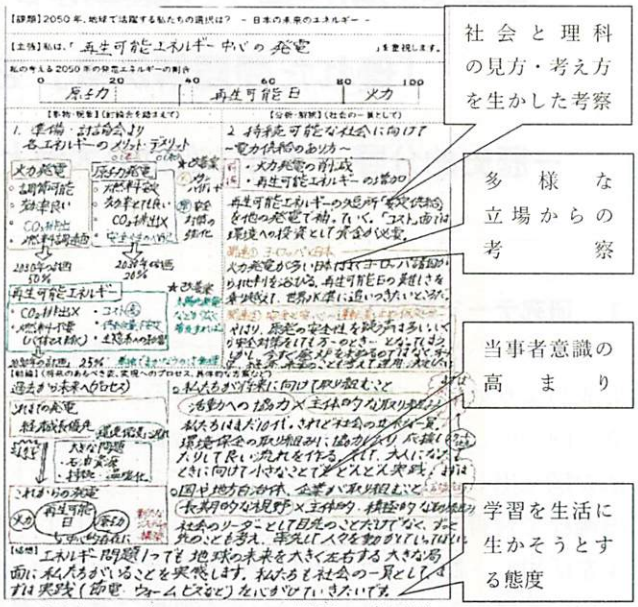
・生徒の意見

	安全性（Safety）	環境（Environment）	経済効率性（Economic Efficiency）	安定供給（Energy Security）
火力	○過去の実績から対策が十分である。	△CO2の排出が多い→将来的には減らす。2050年は使わざるをえない。	○単価が安い。（2番目） ○一定の料金で提供しやすい。	○再生可能Eが作れないときに，代替エネルギーになる。
原子力	△事故が心配　→事故以来，国を挙げて対策してきた。	○温室効果ガスの排出遼が少ない。	○単価が安い。(1番) △事故の損害にかかる費用が大きい。	○省資源で，高エネルギー。 ○再生可能Eの代替エネルギー
再生可能エネルギー	△太陽光パネルなどの廃棄物問題→適材適所の使用。	○温室効果ガスの排出遼が少ない。	△初期費用がかかったり，普及のための国民負担が増加したりする。	△天候などに自然に左右される。→蓄電，電気ネットワークの使用。

4　全体討論を行った。（全体）	10	○フロア全体でのディスカッションを行います。 ・生徒や一般参加者との質疑応答  参加者の質問を集約できるアプリの活用→	○一般参加者からの質疑を取り入れ討論の多様化をねらった。
5　討論会の振り返りを行った。（一斉）	5	○参加者の感想発表と閉会宣言です。討論を踏まえて，再度自分自身の考えを見直してみましょう。	◎今後の発電のあり方について自分なりの考えを持ち，それを表現している。 （ワークシート）

⑷　生徒の学びの実際

資料１は，パフォーマンス課題の成果例である。この生徒は，日本の資源・エネルギー問題の背景を，供給や消費の状況，発電方法の特徴などから理解し，主張に必要な情報を様々な資料から読み取り，自身の考えも踏まえて考察することができている。また，日本の資源・エネルギー問題の解決策や今後のあり方について，理科と社会科それぞれの視点から根拠を挙げ，自分の考えを説明，論述している。さらに，それぞれの視点からの追究内容を比較したり，関連付けたりすることで，問題の解決には，多様な視点からの取組が必要であることを実感している。そして，実生活との関わりを意識した発言や記述が見られる点から，日本の資源・エネルギー問題を自分ごととして捉えようとしていることが見取れる。



資料１　パフォーマンス課題の成果例

4　成果と課題（○成果　●課題）

○授業後のアンケートから，９割以上の生徒が教科学習と実生活の関わりを実感することができたことから，現代社会の諸課題を教材化し，教科横断的な単元設計を行うことは，実生活との結び付きを意識させやすく，多面的・多角的な考察や構想を行う上で効果的であるといえる。

○授業後のアンケートで，「課題の何が原因なのかなど幅広い視点を持って考えることの重要性を学んだ。自ら意見を発信し，それについて他者と討論して探り，より現実的なものにしていくことが重要だと気付いた。」という意見が見られた。本実践が，主権者としての自覚を持って現代社会の諸課題に関わろうとする意識を高めることにつながったことを実感するとともに，思考を深める上で「他者」の存在が大きな影響があることを生徒に感じさせることができた。

○ロイロノートを活用したワークシート（**資料２**）について，授業後のアンケートで約９割の生徒が有用性を実感する結果となった。学習の見通しと振り返り，他者との学習成果の共有が効率よく行えて，一人一人の学習状況に応じて使い方を工夫できるようなワークシートが生徒の学びの深まりにつながったといえる。

●公開討論会で，集めた情報の伝達で終わる生徒が見られた。情報を分析・解釈し，自分の考えとして述べられる思考力・判断力・表現力の向上のための指導を工夫する必要がある。また，当事者意識のさらなる向上のため，教材開発や単元設計の改善に努めたい。



資料２　ロイロノートを用いた単元全体のワークシート

参考文献

・稲垣　忠（2020）「探究する学びをデザインする！情報活用型プロジェクト学習ガイドブック」明治図書
・西岡加名恵・石井英真（2019）「教科の『深い学び』を実現するパフォーマンス評価　『見方・考え方』をどう育てるか」日本標準
・堀　哲夫（2020）「新訂　一枚ポートフォリオ評価 OPPA　一枚の用紙の可能性」東洋館出版社

研究（その２）

公正な判断に基づく最適解を求めて検討を繰り返し，「優れた問題解決者」を目指す生徒の育成

－歴史的分野　「第二次世界大戦と人類への惨禍」の実践より－

（実践者）江角　紀行

１　研究テーマ設定の理由

生徒たちが活躍する近未来の社会では，想像以上の変化や課題が起こり，「持続可能な社会」の形成がより難しくなることが予想される。そのような社会で期待されるのは，様々な課題に自ら立ち向かい，その解決に向けて多様な他者と協働しながらそれぞれの状況に応じて最適な解決方法を探り出していく力を持った人材である。そのような「優れた問題解決者」の育成には，学びの過程で習得した知識を「比較」や「関連付け」，「類推」や「未来予測」，「総合」等の思考スキルを活用し，課題に対する自分の意見をじっくりと分析したり，多様な他者との対話の中で何度も検討を繰り返したりして，公正な判断に基づく最適解を目指すような活動が重要である。そして，身に付けた資質・能力を発揮してよりよい社会の実現を視野に構想したり，自己変容を実感したりすることができるような学びの深まりも大切である。このような教材や他者との「つながり」，獲得した知識や技能の「つながり」を積み重ねていくプロセスが，深い学びにつながっていく。主権者の一人である生徒の「持続可能な社会」の形成に資する力の育成のためには，このような授業を積み重ねることが必要であると考え，本研究テーマを設定した。

２　研究の内容及び方法

(1)　問題解決的な学習の充実

生徒が自ら課題に向き合い，追究して他者と協働しながら解決に向かう鍵となるのは，生徒自身が学習の中に学ぶ意義を見いだすことができるかである。そのような実感を獲得できるように，学習したことを基に現代社会を見つめ，よりよい未来を構想する活動を問題解決的な学習に位置付けた。また，学習指導要領では，「指導と評価の一体化」が一層強調され，その共通項である目標を明確化，構造化することが成否を決定する重要な課題となっている。そこで，**「改訂版タキソノミー」**（詳細は後述）の活用による教育目標の明確化と構造化を図り，生徒を本質的把握に迫らせることが，持続可能な社会の形成に貢献する主権者を育成する上で有効と考えた。

(2)　対話的な学びの充実

公正な判断に基づく最適解を生徒に求めさせるには，社会的事象の背景を熟考させることが大切である。そのため，その背景について事象同士の比較や関連付けなどを行いながら分析させたり，意見の妥当性について他者との議論を通して吟味させたりする場面を設定した。また，**トゥールミン図法**を活用することで，追究成果を論理的に思考させ，議論の焦点化を図り，対話の質的向上を目指した。

(3)　資質・能力が育つ評価の工夫

「優れた問題解決者」を目指す生徒を育てるためには，習得した知識やスキルをよりよい社会の形成に向けて活用させることで，確かな社会認識を育て，現実的な課題解決のプロセスで必要となる思考力や実践力を身に付けさせることが大切である。また，学習後の振り返りにより成果

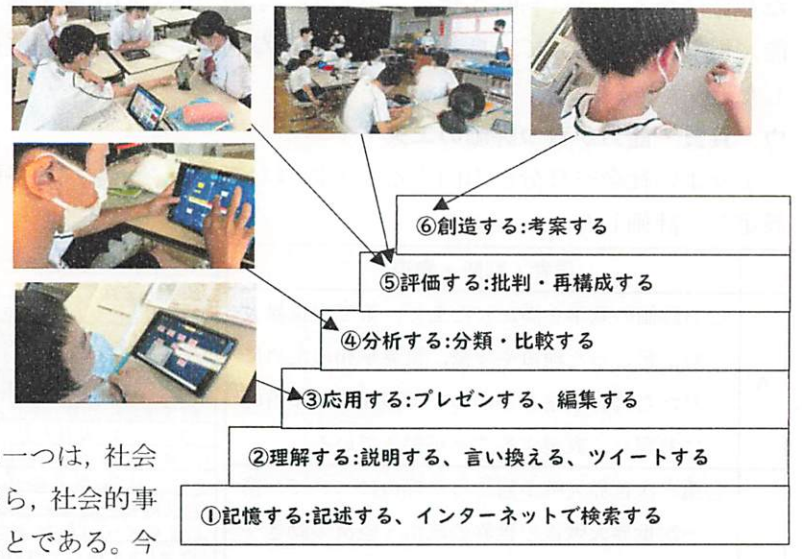
や課題をメタ認知させ，学びの質の向上を図ることも必要である。そのため，パフォーマンス課題の設定とOPPA（One Page Portfolio Assessment）を活用した。

3　研究の実際

(1)　指導の計画

ア　問題解決的な学習の充実

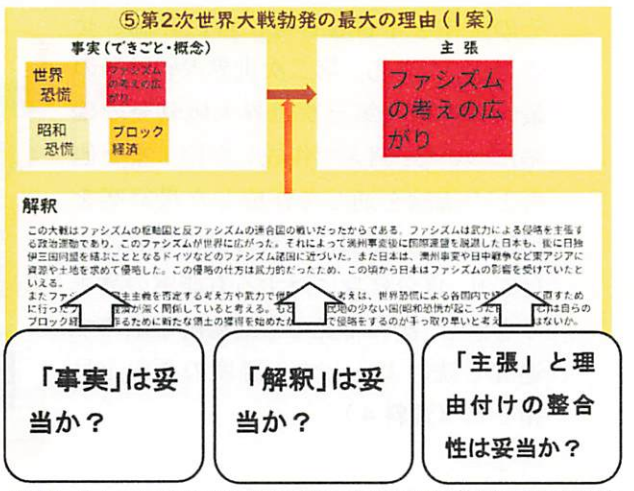
歴史学習の目的は，過去から学び，人類が生存していくための手掛かりを得ることである。つまり，「歴史を学ぶと未来が見えてくる」ようになる必要がある。そのことを生徒に実感させ，生徒が歴史認識を深めていけるような問題解決的な学習の充実を図った。教材への深い理解の条件の一つは，社会的な見方・考え方を働かせながら，社会的事象を多面的・多角的に捉えることである。今回は，「近代の日本と世界」学習後の発展学習として，第二次世界大戦勃発の最大の理由を考察することから，現代社会を捉え直し，第三次世界大戦勃発の確率を未来予測させた。そして，その学習過程の視座として「改訂版タキソノミー」（以下，「改訂版」と略す）を活用した。「改訂版」とは，ブルームらにより開発された「教育目標の分類学」の認知領域を改良し，教育目標を四つの知識次元（「事実的知識」・「概念的知識」・「手続的知識」・「メタ認知的知識」）と６段階の認知過程次元（「記憶する」・「理解する」・「応用する」・「分析する」・「評価する」・「創造する」）に分類したものである。教師は目標の明確化により目標の意味内容を深く理解することができ，指導や評価方法の基盤として用いて意図的に知識の側面と認知過程の側面の発展を図ることができる。この「改訂版」の理論を基に，第二次世界大戦勃発の理由の発散→世界・日本・政治・経済の分類→事象間の関連付け→事実の順序付け→妥当性の視点からの練り合い・高め合い→パフォーマンス課題の活動を設定した（**資料１**）。また，追究時はロイロノートを活用し，思考ツールを基に思考したり，多様な意見を集約したりして，考えを深めさせた。このように，構造的かつ効率的な学習展開を通して，生徒の深い理解を目指した。



資料１　改訂版タキソノミーに基づく学習過程

イ　対話的な学びの充実

公正な判断に基づく最適解を生徒に求めさせるには，社会的事象の背景を熟考させることが重要である。そのため，他者との議論を活性化させる工夫をした。議論を通して身に付く力には，次の三つの力が考えられる。「自己の考えを調整・深化させる力」，「多様な考えを基に他者とよりよい考えを導き出す力」，「人間関係の調整力」である。そして，その議論の活性化の重要な鍵となるのが意見の「対立と合意」である。そこで，まずは個人で単元を通して習得した学びを基に，トゥールミン図法を活用して，第二次世界大戦勃



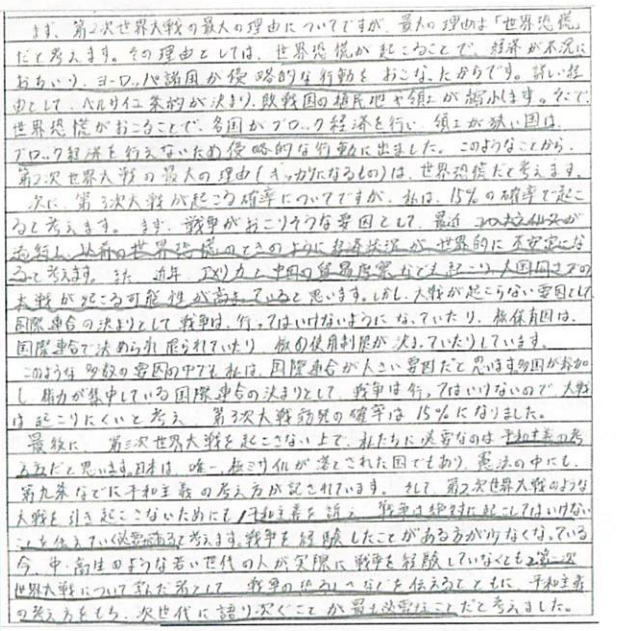
資料２　トゥールミン図法による思考シートと妥当性を検討する三つの視点

発の最大の理由と第三次世界大戦勃発の確率について論理的に考察させた。次に，小集団で「引用した事実の妥当性」「事実に対する解釈の妥当性」「主張と理由付けとの妥当性」の三つの視点から検討し合い，自己の考えを調整・深化させた（**資料２**）。そして，それらの多様な意見を基に，グループ内の対立した考えを調整し，よりよい考えを創造させた。さらに，学級全体でグループごとに発表し，三つの視点から練り合わせることで，自分たちの主張や根拠を補強し，より確かな意見になるように判断させた。そして，学級全体での議論を通して，新たに習得した知識や技能，視点等を活用して，自分の意見を公正な判断に基づく最適解に向けて修正し，深い理解へ促した。

ウ　資質・能力が育つ評価の工夫

よりよい社会や自分を志向することにつながるパフォーマンス課題（前述）とルーブリックを設定し，評価した。

	思考・判断・表現
A	○B評価の基準を満たした上で，第二次世界大戦が起こった理由や今後，世界平和のために私たちに必要なことについて多面的・多角的に考察し，表現することができている。
B	○第二次世界大戦が起こった理由について，第一次世界大戦後の世界の政治・経済の動きや変化，我が国への影響などの中から考え，それを踏まえながら，今後，世界平和のために私たちに必要なことについて論理的に考察し，表現することができている。
C	○第二次世界大戦が起こった理由や今後，私たちに必要なことについて，論理的に考察し，表現することができていない。



資料３　生徒Ａのパフォーマンス課題

本パフォーマンス課題は，生徒に習得させた知識やスキルをよりよい社会の形成に向けて活用させることで，確かな社会認識を育て，現実的な課題解決のプロセスで必要となる思考力や実践力を身に付けさせ，「歴史を学ぶと未来が見えてくる」ことを実感させることをねらい設定した（**資料３**）。また，主体的な学びの充実には，「見通し」と「振り返り」が大切である。その実現に向けてOPPAを活用した。OPPAとは，「教師のねらいとする授業の成果を，学習者が１枚の用紙の中に学習前・中・後の学習履歴を記録し，その全体を学習者自身に自己評価させる方法」である。第二次世界大戦勃発の最大の理由と第三次世界大戦勃発の確率について，個人で作成した第１案と他者との議論を通して作成した最終案を比較し，メタ認知により自己の変容に気付かせ，自分自身に対する有能感の高まりを感じ，次の単元でも最適解を求めて追究し続けようとする態度の涵養を目指した（**資料４**）。



資料４　OPPA

⑵　指導の実際

ア　単元名

近代の日本と世界（カ）「第二次世界大戦と人類への惨禍」（第３学年）

イ　単元目標

○第二次世界大戦と人類への惨禍などについて理解することができる。　「知識及び技能」

○経済の変化の政治への影響，戦争に向かう時期の社会や生活の変化，世界の動きと我が国との関連などに着目して，事象を相互に関連付けたり，近代の日本と世界を大観したりして，近代の社会の変化の様子や時代の特色を多面的・多角的に考察し，表現することができる。

「思考力・判断力・表現力等」

○近代の日本と世界について，国際平和の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする。　「学びに向かう力，人間性等」

ウ　重点目標

＜本質的な問い＞

繰り返された世界大戦を次に起こさせないためには，どのようなことが必要だろう。

＜永続的な理解＞

世界恐慌による世界的な経済の混乱や社会問題の発生，ファシズムの台頭，世界の動きと我が国の動きなど，多様な事象が複雑に絡み合い，第一次世界大戦の反省は生かされず第二次世界大戦が勃発し，人類に惨禍を及ぼした。現在も新型コロナウィルスの影響による不況が世界中に広がっていたり，核ミサイル保有国が拡大したりするなど，危険な要因は多く点在している。自国優先ではなく国際協調の精神を各国が重視し，国民も自国や世界の政治や経済の状況を注視し，平和な国家や国際社会形成のために関わっていこうとすることが大切である。

エ　評価規準と評価方法

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
経済の世界的な混乱と社会問題の発生，昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治・外交の動き，中国などアジア諸国との関係，欧米諸国の動き，戦時下の国民の生活などを基に，軍部の台頭から戦争までの経過と第二次世界大戦と人類への惨禍などについて理解している。	①経済の変化の政治への影響，戦争に向かう時期の社会や生活の変化，世界の動きと我が国との関連などに着目して，事象を相互に関連付けるなどして，近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し，表現している。 ②近代の日本と世界を大観して，時代の特色を多面的・多角的に考察し，表現している。	近代の日本と世界について，よりよい国際平和の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

パフォーマンス課題	その他の評価方法
あなたは歴史研究者です。今回，Aテレビ局から終戦記念日の８月 15 日に放送される特別番組「３回目の世界大戦を起こさないためには？」への出演依頼が来ました。番組プロデューサーは，「この番組は，戦争経験者が年々減少する中，特に今後の時代の担い手となる若者世代に向けて発信したいと考えています。そこで，まず前半では，なぜ第二次世界大戦が起こったのかという理由について議論していただきます。そして，後半では３回目の世界大戦が勃発する確率を世界の現状の分析を基に説明していただき，最後に勃発させないために今後，私たちに必要なことについて主張していただきます。」と説明しました。みなさんは，この番組で何を語りますか？	○観察 ○ワークシートへの記述 ○ロイロノートへの記述

オ　指導計画（全 14 時間）　※ここでは，発展学習にあたる三次の指導計画を示す。

時間		ねらい・学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
三次	11	・各自でロイロノートを活用して，第二次世界大戦の背景を熟考したり，現在の世界や国内情勢から第三次世界大戦が起こる可能性を未来予測したりして，学習したことを実社会に生かそうとする。	思 態		・既習事項を基に，ロイロノートを活用して第二次世界大戦勃発の理由を多面的・多角的に考察している。（ロイロノート） ・過去のできごとの因果関係を生かして，現在を見つめ直し，未来の社会を予測している。（ロイロノート）
	12	・グループ内で自分の結論を発表し合い，結論の妥当性について議論し，自分の意見を調整する。	態		・妥当性に関する仲間からの意見や仲間の発表内容から，自分の結論をよりよいものに調整している。（ロイロノート）
	13 本時	・学級全体の場で，各グループでの結論を発表し合い，相互に三つの視点から妥当性について議論し，自分の意見を調整する。	思 態	○ ○	・第二次世界大戦勃発の理由や現代社会の特色を多面的・多角的に捉え，事象同士を関連付けて考察している。（ロイロノート） ・多様な意見から分析や検討を繰り返し，生徒が最適解を目指して自己調整しようとしている。（ロイロノート）
	14	・パフォーマンス課題に取り組み，軍部の台頭から戦争までの経過や第二次世界大戦と人類への惨禍などを踏まえながら第二次世界大戦勃発の理由について考察したり，大戦の反省から第三次世界大戦を起こさないために必要なことを考えたりして，世界平和を希求しようとする。	思	○	・総括的評価

(3)　生徒の学びの実際

自分の考えについて振り返って、よかったこと、足りなかったこと、新たな発見は?

第三次世界大戦が起こる理由として、始めの意見では戦争が起こる理由について書くことは出来ていたが、戦争が起こらないと考える理由につていて書けていなかったため、最終案では、他の班の考えや、今の情勢も踏まえて、多面的に根拠付けすることが出来たと思います。また、過去の伝染病などをもとにコロナウイルスではどの様に世界が変化するのかを論理的に考えることが出来ました。多面的に物事を判断し根拠付け論理的な主張を行う力がよりついたため、その点は成長出来たと思います。
コロナウイルスなどの経済的な影響の面からは考えることが出来ましたが、今の様子を政治的な面から読み取る力が足りていないと思うので、公民分野などを通して政治の面からも物事を見れる力を伸ばしていきたいです。

資料５　生徒Ｂの学びのふりかえりシート

資料５は，生徒Ｂの学びのふりかえりシートである。これまでの学習を振り返り，第二次世界大戦勃発の最大の理由と第三次世界大戦勃発の確率についての１案と最終案を比較し，その変容から成果や課題等が記述されている。生徒Ａの記述内容からは，１案の根拠が不十分であることに自ら気付き，最終案では他者の意見や現在の社会情勢を踏まえ多面的な根拠に調整している点，過去の伝染病の事例から新型コロナウィルスが世界に与える影響について類推することができている点，以前よりも論理的に説明できるようになった自分の成長に気付けている点，説明において政治の視点がない課題に気付き，今後の公民の授業で学ぼうとする主体的な態度が見られる点などが読み取れ，本実践が生徒の深い理解に一定の有効性を示していたことが伺える。

また，先述のパフォーマンス課題の結果として，生徒 64 人の中でＡ評価は 28 人，Ｂ評価は 27 人，Ｃ評価は９人であり，約 40％の生徒が第二次世界大戦勃発の理由や今後，私たちに必要なことについて多面的・多角的に考察していることが分かる。一方で，一面的な考察や課題に沿わない考察の生徒が約 60％おり，指導の見直しが必要である。

4　成果と課題（○成果　●課題）

○歴史学習の目的は，人類が生存していくための手掛かりを得ることであり，「歴史を学ぶと未来が見えてくる」というようにならなくてはならない。本実践は，そのような歴史を学ぶ意義を生徒に実感させるものであった。

○情報の収集や共有，振り返りなど随所に ICT（ロイロノート）の活用が見られ，活動が効率的で理解を深める上で効果的であった。

○魅力あるパフォーマンス課題があることで，生徒の意識を新しい挑戦に向かわせ，課題解決への意欲を喚起することができていた。

○OPPA によって授業の全てがポートフォリオになっていて，生徒は授業のプロセスの様々な場面においてリフレクションしたり，自分自身の成長をメタ認知して成長を実感したりすることができた。

●三つの妥当性について討論という形態は取り入れているが，まだまだ生徒同士が発表して終わりという印象に終わっており，そもそも教師が見守っているだけで議論に参加していない。ヴィゴツキーの提唱する「発達の最近接領域」の考え方にあるように，生徒同士だけでは到達できない領域に教師の適切な関与により生徒を引き上げることが必要である。

●生徒の発言は，まだまだ公式見解的な認識に終わっており，人間の行為について本音でどれだけ考え，意見を発表できるかが社会科の本質である。そのように，社会には本音と建て前が共存している難しさを生徒に感じさせることが，中学校段階での最終的な合意形成の在り方を学ぶことになる。

●パフォーマンス課題の評価について，妥当性と信頼性の確保が必要であり，評価者が変わっても結果が同じかという「評価者間の信頼性」，評価者が継続して同じ評価ができるかという「評価者内の信頼性」などを高めていくために評価規準や評価基準の吟味が必要である。

また，授業後の社会科アンケートで「あなたの学習の理解において，終戦までの授業後に実施した発展学習はどの程度有効でしたか」の項目について，「とても有効であった」74%，「まあまあ有効であった」24%，「どちらともいえない」２%という結果で，約 90%の生徒が有効であったと感じており，おおむね本実践が効果的であったことが伺える。今後も，上記の成果と課題を踏まえながら，生徒の社会認識を深め，持続可能な社会の形成に資する主権者としての力を育成できるように実践を重ねたい。

参考文献

・澤井陽介・加藤寿朗（2017）「見方・考え方」東洋館出版社
・田村学（2018）「深い学び」東洋館出版社
・西岡加名恵・石井英真（2019）「教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価　「見方・考え方」をどう育てるか」日本標準
・原田智仁（2018）「社会の授業づくり」明治図書
・堀哲夫（2019）「一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性」東洋館出版社
・文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編」東洋館出版社

研究（その３）

よりよい未来社会を創造する力を育てる指導の工夫
－比較の視点を取り入れた歴史的分野「中世の日本」の学習を通して－

（実践者）萩山　知治

１　研究テーマ設定の理由

学習指導要領では，歴史的分野の学習の中心は「我が国の歴史の大きな流れ」の理解であり，「各時代の特色」はそのために踏まえる内容であるということが明確にされている。また，歴史的分野のまとめとして位置付けられている単元「現代の日本と世界」には，「これまでの歴史学習を踏まえ，現在と未来の日本や世界の在り方について，課題意識をもって考察，構想し，表現すること」とある。つまり，「時代の特色」を捉える学習は，歴史的分野の目標を達成するために欠かせない学習であること，また，歴史的分野における「構想」の学習は，これまでの歴史学習を踏まえた学習であることが提起されている。

そこで生徒たちには，予測困難な社会の中においても，現代社会に見られる課題を把握し，この先のよりよい社会の姿を創造する力を身に付けさせたい。そのための具体的な手立てとして，社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，それを基によりよい社会の在り方について議論したりする学習展開の工夫を行うことで，未来志向の判断力や行動力の育ちにつながると考え，本研究テーマを設定した。

２　研究の内容及び方法

(1)　比較の視点を用いた追究活動

各時代の特色を明確に捉えさせるためには，比較の視点を持たせながら，追究活動に取り組ませることが大切である。例えば，中世の特色を理解するためには，前の時代と比較することで，その共通点や相違点，関連性を見いだすことができ，時代の特色がより浮き彫りになると考えられる。さらに，複数の同じ視点から時代ごとの特色を追究させることで，歴史の大きな流れの理解につながり，歴史分野のまとめに位置づけられている「構想」の学習への深い学びも期待できる。このように，その時代の特色や課題を捉えさせた上で，次の時代のよりよい社会の在り方を考察する活動を取り入れることで，未来社会を予測し構想できる力の育成につなげたい。

(2)　ジグソー学習による深い学び

複雑化する社会の中で，生徒たちが主体的に生きていくためには，知識を取り込むだけでなく，社会の中で生きて働く知識として様々な状況に応じて使いこなすことが求められている。このような力を身に付けさせるためには，追究活動の際にジグソー学習を取り入れることが有効であると考える。ジグソー学習は，生徒同士で教え合う授業を展開し，その活動を通して自らの言葉で学んだことを表現していく活動である。つまり，その過程で理解できていないこととそうでないことが明確になるとともに，知識の表現方法や活用方法も学ぶことができ，深い学びを期待できる。このようにして，過去のできごとの理解や解釈に基づいた社会認識を深め，よりよい未来社会を創造する力の育成につなげたい。

３　研究の実際

(1)　指導の計画

本単元では，本質的な問いとして，「中世とは，どのような時代なのだろう」を設定した。これを解決させるために，単元の追究活動においては，常に前の時代と比較するという視点を持たせた。例えば，単元の導入では，「古代に見られた課題は，中世ではどのようになるのだろう」

という問いを設定し，古代までの学習内容と比較しながら当時の社会の課題を考察させることで，中世の特色に対する関心や課題意識につなげた。また，第三次では，「室町時代は，鎌倉時代からどのように変化した時代といえるだろう」という問いを設定し，四つの視点（政治の動き，社会の様子，外国との関わり，文化の特色）に着目し，時代の変化を追究させた上で，二つの時代を総合して中世の特色を捉えさせる展開とした。この四つの視点から時代の特色を捉える手法は，古代の学習でも行っており，同じ視点からその時代の特色を追究させることで，中世の特色がより明確になるようにした。単元のまとめでは，中世の特色から見いだせる課題を考察し，「よりよい近世社会にしていくために，どのようなことが必要だろう」を設定することで，単元全体での既習内容が，次の時代の社会の在り方や課題について予測したり考察したりする上で有用であることに気付かせたいと考えた。このように，比較の視点を取り入れた追究活動を行うことで，より多面的・多角的に考察し，中世の特色を自分の言葉で表現できるようになることを目指した。

ジグソー学習については，第一次から第四次における「まとめ」の場面において，多様な立場や意見を持った仲間と協働して練り合い・高め合いの場として設定した。まず，四人班の生徒一人一人が「政治の動き」「社会の様子」「外国との関わり」「文化の特色」の視点を一つずつ担当して追究し，自分の考えを持たせた。それを基に，班員で意見を交換させたり，それを根拠に自分の考えを再考させたりすることで，多面的・多角的な考察による思考の広がりや深まりを目指した。また，自分の考えを述べる際には，「○○○の視点から考えた場合，鎌倉時代と比べて，室町時代は△△△の時代といえると思います。そう判断したのは……だからです。」と定型文を活用することで，比較の視点を持たせながら，具体的な事例を上げて自分の立場や根拠を明確にして表現ができるようにした。さらに，根拠となった資料を提示することで，読み取りの技術の向上や，他者の読み取りを批判的に思考し、意見を述べやすくするよう配慮した。そして最後に，班や全体での話合いを生かし，室町時代の特色を個人で文章にまとめさせた。

(2) 指導の実際

ア 単元名

中世の日本（第１学年）

イ 単元目標

○中世の日本の歴史の大きな流れを，世界の歴史を背景に，各時代の特色を踏まえて理解するとともに，諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けることができる。 「知識及び技能」

○中世の日本に関わる事象の意味や意義，伝統と文化の特色などを，時期や年代，推移，比較，相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察したり，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりすることができる。「思考力，判断力，表現力等」

○中世の日本に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする。 「学びに向かう力，人間性等」

ウ 重点目標

＜本質的な問い＞

中世とは，どのような時代だろうか。

＜永続的な理解＞

中世とは，武士が台頭して武家政権が成立し，その支配が次第に全国に広まるとともに，東アジア世界との密接な関わりが見られ，諸産業の発達と都市や農村の変化，民衆の成長を背景とした社会や文化が生まれた時代である。鎌倉幕府の成立によって，武士には為政者としての能力が必要になり，「弓馬の道」だけでなく，「文武両道」を身に付けることが求められた。一

方，武家社会の動揺や転換が見られた中世後半においては，庶民たちがよりよい生活を求めて団結し，様々な工夫を取り入れることで諸産業を発達させ，自らの地位を向上させた。

エ　評価規準と評価方法

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
中世の日本の歴史の大きな流れを，世界の歴史を背景に，各時代の特色を踏まえて理解するとともに，諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けている。	中世の日本に関わる事象の意味や意義，伝統と文化の特色などを，時期や年代，推移，比較，相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察したり，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論している。	中世の日本に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする。

パフォーマンス課題	その他の評価方法
タイムマシーンで古代の人々（平安時代の人々）が附属中学校にやって来ました。校舎が立ち並び，生徒は制服に身を包み，そして馬ではなく自転車が走っている光景に驚き，なぜこのような時代になったのか説明してほしいと言われました。そこで，附属中の１年生が中世の特色を，２年生が近世と近代，３年生が現代を説明することになりました。中世の特色について，よりよく生きようとした人々の営みに着目し，Ｂ５判１枚のレポート用紙にまとめなさい。	○観察 ○ワークシートへの記述 ○ペーパーテスト

オ　パフォーマンス課題のルーブリック

「よりよい社会」を実現するための資質・能力を見いだす手がかりを得られるように，既有の知識や技能を生かすパフォーマンス課題に取り組ませ，下記のようなルーブリックを用いて評価するものとした。

	思考・判断・表現
A	「政治の動き」「社会の様子」「外国との関わり」「文化の特色」の四つの視点を基に，視点相互の関わりを持たせながら，この時代に生きた人々の営みに着目し，中世の特色についてより多面的・多角的な深い考察が読み取れる。
B	「政治の動き」「社会の様子」「外国との関わり」「文化の特色」の四つの視点を基に，複数の視点からこの時代に生きた人々の営みに着目し，中世の特色について論理的に考察し，自分の言葉で表現している。
C	特色の根拠にあげられている内容と結論が一致しておらず，四つの視点から中世の特色について述べている。

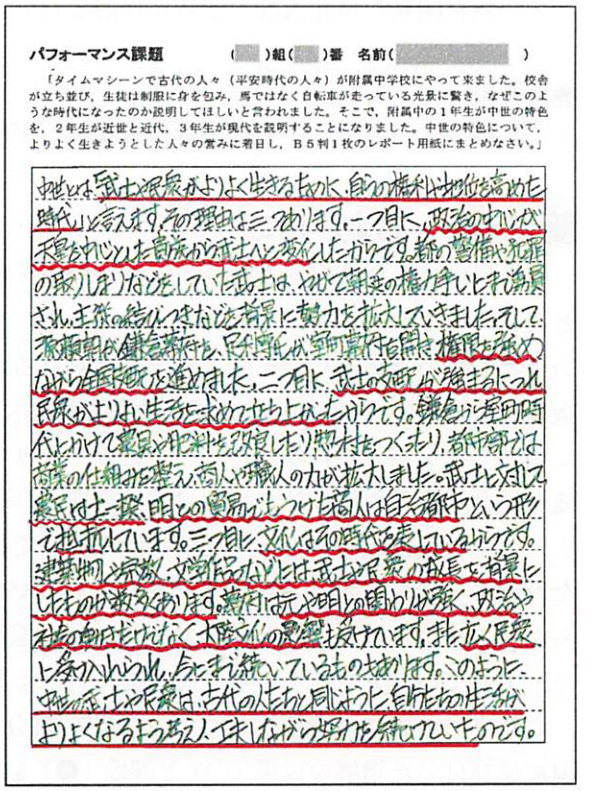
カ　指導計画（全16時間）

時間		学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
一次	2	○古代における学習成果を基に，古代の特色と課題をまとめる。	知		・古代に見られた課題について考察し，その結果を言葉で表現している。（ワークシート）
二次	5	鎌倉時代の特色を，古代との比較の視点から捉える。 ○武士の政治への進出 ○農業や商工業の発達 ○鎌倉時代の文化 ○中世前半のまとめ ※ジグソー活動	知 思 態	○	・鎌倉幕府が成立した背景やその支配の広まりを理解している。（ワークシート） ・古代との比較を基に，鎌倉時代の特色を考察し，その結果を言葉で表現している。（ワークシート） ・鎌倉時代の特色について意欲的に意見交換し，自分の考えをよりよいものに調整しようとしている。（観察）
三次	7	室町時代の特色を，鎌倉時代との比較の視点から捉える。 ○ユーラシアの変化 ○武家政治の展開と東アジア ○民衆の成長と新たな文化の形成 ○中世後半のまとめ ※ジグソー学習	知 思 態	 ○ ○	・室町幕府が成立した背景や，ユーラシアの変化と東アジアとの交流を理解している。（ワークシート） ・鎌倉時代との比較を基に，室町時代の社会の変化の様子を考察し，その結果を言葉で表現している。（ワークシート） ・古代と中世の共通点や相違点について意欲的に意見交換し，自分の考えをよりよいものに調整しようとしている。（観察）

四次		○中世に見られた課題を基に，よりよい近世の在り方を予測する。　※ジグソー学習	知	○	・中世に見られた課題を見いだし，中世の特色やよりよい近世の社会を考察し，その結果を言葉で表現している。（ワークシート）
	2	○パフォーマンス課題に取り組み，「中世がどのような時代であるか」について自分の考えをまとめる。	思	○	・パフォーマンス評価

(3)　生徒の学びの実際

パフォーマンス課題に対する評価結果は，全64名中，評価Ａが28人，評価Ｂが36人，評価Ｃが0人であった。**資料１**の生徒は，評価Ａである。この生徒は，まず始めに中世の特色を端的に述べ，その根拠をナンバリングすることで，論理的に表現していた。また，課題で求められている，中世によりよく生きようとした人々のことを，この時代に勢力を持った武士と民衆であると理解していた。さらに，中世の特色を追究する上で活用した四つの視点（政治の動き，社会の様子，外国との関わり，文化の特色）を基に，視点相互の関わりに触れながら表現しており，思考力，判断力，表現力の高まりを見取ることができた。評価Ｂの生徒は，四つの視点を基に，武士と民衆の営みに着目しながら，根拠を具体的に説明したり，端的に分かりやすく表現したりできていた。しかし，多くの生徒が，自分が選んだ視点について，順に並べて論述しているだけであり，視点相互に関わりを持たせた多面的・多角的な深い考察を読み取ることはできなかった。評価Ｃの生徒がいなかったことは，前述の研究の内容及び方法(1)・(2)を繰り返し実践したことによる一定の成果であると考える。ジグソー学習については，明確な役割分担のもと，積極的に級友に伝え合おうとする姿が随所に見られた。多様な考えを理解し合ったり，それを基に自分の考えをよりよいものに調整したりして，話合いを進めていた。多様な意見を合意していく中で，考えの深まりが見られた。


パフォーマンス課題　（　）組（　）番　名前（　　）

「タイムマシーンで古代の人々（平安時代の人々）が附属中学校にやって来ました。校舎が立ち並び，生徒は制服に身を包み，馬ではなく自転車が走っている光景に驚き，なぜこのような時代になったのか説明してほしいと言われました。そこで，附属中の１年生が中世の特色を，２年生が近世と近代，３年生が現代を説明することになりました。中世の特色について，よりよく生きようとした人々の営みに着目し，Ｂ５判１枚のレポート用紙にまとめなさい。」

中世とは武士と民衆がよりよく生きるために自分の権利や地位を高めた時代と言えます。その理由は三つあります。一つ目に，政治の中心が不安をかかえた貴族から武士へと移ったからです。都の警備や荘園の取りしまりなどをしていた武士は，やがて朝廷の権力争いにまき込まれ，まずの安定した政治に努力を注ぐようになりました。そして，天皇家や藤原氏などの貴族が宮廷文化を開き，権限を強めながら全国統治を進めました。二つ目に，武士の勢いが強まるにつれ民衆がよりよい生活を求めて立ち上がったからです。鎌倉から室町時代にかけて農具や肥料を改良したり，惣村をつくり，荘園では荘園の仕組みを整え，商人や職人の力が広まりました。武士と対して農民は土一揆，明との貿易が広がった商人は自ら商売をという形で抵抗しています。三つ目に，文化はその時代を表しているからです。建築物や彫刻，文学作品などには武士や民衆の姿を背景にしたものが多くあります。茶道には武士や明との関わりが強く，政治や社会の動きだけでなく，文化の影響も受けています。また，広く民衆に受け入れられ，今まで続いているものもあります。このように，中世の武士や民衆は，古代の生活から同じように自分たちの生活がよりよくなるようにと工夫しながら努力を続けていたのです。

資料１　生徒のワークシート

4　成果と課題（○成果　●課題）

○追究過程やパフォーマンス課題の記述から，比較の視点を持たせることで，社会的事象の意味や意義を深く理解し，根拠を明確にしながら中世の特色を捉えることができていた。また，近世のよりよい社会の姿について，生徒は「武力で統一を目指す政治や社会の仕組みから，民衆の声に耳を傾けるシステムに変えるべきだ」「農民への二重支配による税負担をやめ，ゆとりある税制度にすべきだ」「朝貢形式の日明貿易は平等ではない。いずれ侵略される恐れもあるので対等な立場にすべきだ」「民衆の成長によって文化が広まったが，識字率の改善を図るための教育の制度が必要だ」などと記述していた。これらのことから，時代の特色を捉える学習を充実させることが，よりよい未来社会を創造する力の芽生えにつながることが分かった。

●しかし、よりよい未来社会を創造する力をどう見取ればよいか、課題が残った。パフォーマンス課題における上記視点の捉えを明確にした問いや，それを見取るルーブリックを吟味することで，未来志向の育ちを見取ることができたのではないかと反省している。また，生徒に実施したアンケートによると，ジグソー学習について多くの生徒が肯定的な意見であったのに対し，否定的に捉えている生徒が 64 名中 5 名おり，その理由として「個人で追究した方が早い」「自分のペースで学習できるため，分かりやすい」などと記述していた。上記の成果と課題を踏まえ，教材開発や単元設計をさらに検討したい。

参考文献

・文部科学省(2018)「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　社会編」東洋館出版社

第３章　おわりに

社会科では，持続可能な社会を支える資質・能力を「よりよい自分や社会の姿を思い描く力」と捉え，その育成に向けて研究を行ってきた。3 年間を通して，いかに生徒一人一人が社会の担い手としての自覚や社会参画意識を高められるかを基本としながら，教材開発や単元構成，学習指導方法の工夫，評価計画や方法の改善を中心に学習の充実を図ってきた。これまでの研究から，二つのことが明らかになった。一つ目は，よりよい自分や社会の姿を思い描く力の育成には，生徒が社会的事象や現代社会における諸課題を「自分ごと」として捉えることが重要であるということ。二つ目は，その力は課題の要因や背景を様々な見方・考え方を働かせて熟考し，深い学びを形成する過程において涵養されていくものであることである。学習活動を通して，生徒一人一人が「これからの社会を形成していく一翼を担う存在である」という自らの価値を自覚することで，よりよい自分や社会の姿を思い描く力はより確かなものになっていくだろう。

これまでの研究の総括として，「よりよい自分や社会の姿を思い描く力を発揮して学ぶ姿」の実現に結び付いた指導の成果（○）と課題（●）を整理し，来期の新たな研究につなげていきたい。

教材開発・単元構成について

○現代社会の諸課題を中心教材とした単元設計を行ったり，実社会に実在する事象を用いて設定したパフォーマンス課題を実施したりすることで，生徒が主体的に追究活動に取り組むとともに，学習内容を自身の生活や社会に生かそうとする態度を引き出すことができた。

●生徒が追究したことを第三者（専門家等）に評価してもらう場面などを単元に位置付けることで，更に社会的事象を「自分ごと」として捉え，学びの意義が感じやすくなると考える。

学習指導方法の工夫について

○シンキングツールを用いた追究活動や議論を充実させたり，ICT を用いて多様な他者の考えを取り入れる場面を設定したりしたことで，他者の考えが自らの思考を深める上で重要なものであることを実感するとともに，生徒それぞれの自己有用感の高まりが感じられた。

●生徒同士の話合い活動や議論の場を設定することで一定の思考の深まりは見られたが，更に生徒が批判的思考での吟味を行えるようにしたい。そのためには，発問や資料提示を工夫するなど，教師のコーディネート力の向上が必要である。

評価計画や方法について

○単元全体を見渡せるワークシートを活用し，学習前後の考えの変容を捉えさせたり，学習態度の振り返りを充実させたりしたことで，生徒のメタ認知能力や向学心を高めることができた。

●パフォーマンス課題のルーブリックの客観性・妥当性を高めたり，総括的評価につなげるための効率的・効果的な形成的評価の実践について研究したりしていく必要がある。